京都市立葵小学校

昨年度から進める授業改革を土台に活発な話し合い活動を全学年で推進

子どもたちが自ら学級づくりに参画する、新たな学級経営システム「学級力向上プロジェクト」（開発者：早稲田大学教職大学院教授田中博之先生）。いじめがない、安心できる学級づくりに向けて、実践する学校も増えています。今回は、昨年度から学校全体で同プロジェクトを導入した京都市立葵小学校の取り組みをご紹介します。

アンケート結果を基にディスカッション

「今回は『尊重』、『仲直り』の項目が低かったね」「どのように学級目標に反映させようか」

4月下旬、京都市立葵小学校6年1組にて、学活の時間を利用して行われた学級目標づくり。このときに用いられたのが、「学級力アンケート」の調査結果（学級力レーダーチャート）でした。子どもたちはチャートを見ながら、自分たちのクラスの状態や課題を分析。それを基に、班、そしてクラス全体でディスカッションしながら、学級目標をつくりあげていきます。

ディスカッションでは、「（数値が低かった）『尊重』と『仲直り』のどちらを優先するか」について、活発な議論が行われましたが、ある女子児童の「どちらもよりよい学級をつくるための大事な要素。両方を組み合わせた学級目標にしよう」との意見にみんなが賛同。最終的には、クラス全員が納得した上で「お互いを尊重し合い、素直に謝れる学級」という目標に決まりました。

学級の状態を「メタ認知」できる

同校では、昨年度から、この学級目標づくりを含め、年間3回にわたり、学級力向上プロジェクトを全学年で推進。学級力アンケートを基にクラスの状態を把握し、具体的な目標・行動につなげています。市村淳子校長先生は、「学級力アンケートは、子どもたちが学級の状態を『メタ認知』するための欠かせないツール。クラスの課題は何なのか、改善には何が必要なのかを、教師だけでなく、子どもたち自身が考えられる点が最大の魅力です」とその意義を語ります。

市村 淳子校長先生

また、同校の研究主任で、この日の授業も担当した樫原貴博先生も「これまでの学級目標はいくら耳当たりのいい言葉が並んでも、どこか根拠が希薄で、漠然としたものが少なくありませんでした。しかし、学級力アンケートを行うと、クラスの姿が数値となって出てくるので、目標もより具体的なものになっていきます。本校では生徒指導と連動させながら実施しています」と話します。

普段の授業の充実が効果をもたらす

同校の取り組みの最大の特徴は、子どもたちが主体的に話し合いを進めている点にあります。特に、高学年になると、司会を担うのも、活動の時間配分を決めるのも子どもたち自身。単に意見を言い合うだけでなく、議論の内容を整理しながら、結論も自分たちで導きます。どうしてそのような活動が可能なのか、秘訣はあるのか。市村校長先生は、葵小学校が昨年度から進める授業改革が実を結んだ結果と言います。

「当校では、どの学年でも授業を行う際に必ず『課題設定』を行います。授業の課題は何なのか、何を学ぶための時間なのかを、可視化して子どもたちと共有する。そして、いかにその課題を解決するかという観点から、さまざまなアプローチを駆使して、授業を進めます。最近では子どもたち自身が学習課題を設定したり、単元計画の中身を考えるようになってきました。このような目的意識を明確にした、本校の新たな授業スタイルと学級力の話し合い活動はとても親和性が高いと思います」

同校が課題設定と同時に力を入れているのが「対話型授業」の推進で、特にコミュニケーションの促進に向けて「質問力」を重視しています。昨年度まで研究主任を務めた小林正幸先生が「どのような質問をすると、話題が共有され、互いの考えが広がったり、深まったりするのかを子どもたちに考えさせることが大事」と話すように、同校では、状況に応じた適切な質問の仕方をまとめた「質問の技カード」や、質問力を自ら判断できる「検定シート」を作成・活用。さらに、対話的な学びへと子どもを導くために、ＩＣＴ機器、コミュニティボードなど、多様な情報処理ツールも積極的に活用しています。

「学級力向上プロジェクトも、普段の授業の延長線上にある取り組み。全学年共通の授業方法がしっかり校内に浸透しているので、教師も子どもたちも無理なく実践できています。たとえ1年生でも教師の適切な導きがあれば、子どもたちは活発に話し合い活動を行います」（樫原先生）

樫原 貴博先生

学校目標の策定にも活用したい

全校を挙げて、学級力向上プロジェクトを実施してから1年が経過。市村校長先生は「この間、子ども同士の関係性がより良いものになり、喧嘩や言い争いなどのトラブルも目に見えて減りました。さらに、掃除や挨拶を熱心に行う子どもたちも増えています。その様子が保護者や地域の方々にも伝わったのでしょう、学校評価アンケートの数値も向上してきました。子どもの姿を通して、学校を好意的に見てくださる方々が増えてきました」と、プロジェクトの成果を話します。一方、樫原先生は、「一連の授業や学級力の取り組みを通して、コミュニケーションが活発になり、学級のまとまり、つながりが強くなりました」と語ります。

最後に、今後の抱負を問うと「学級力アンケートの調査結果は、子どもたちに獲得させたい資質・能力を決める際の根拠になる基礎資料の一つ。より子どもたちの実態に基づいた目標とするためにも、今後は、学級目標のみならず、学校教育目標を定める際にも学級力アンケートの活用を検討したい」と市村校長先生は話しました。

活発にディスカッションする子どもたち

はがき新聞も活発に

同校では授業や活動を行った後に、学習の「目当て」が達成できたかを振り返る機会として、「はがき新聞」を積極的に活用しています。「分量もちょうどよく、短時間で書くことができるのも利点の一つ。実践するほどに、子どもたちの書くスピードも上がってくるので、授業にも使いやすい。年間20枚以上も書くクラスもあります」（小林先生）。「発信、交流がしやすい点がメリット。はがき新聞の記述内容を通じて友だちの考えを理解したり、言葉を交わしたりすることで、より良い人間関係の形成にもつながっています」（樫原先生）。

学級目標づくりの授業後に作成したはがき新聞（いずれも6年生）